日本の温泉の歴史と文化(一)　「溫(温)泉」という言葉が結ぶ中国と日本

環太平洋造山帯に位置している日本は有数の火山国である。火山はときに脅威となるが、富士山のような秀麗な山岳景観と豊富な温泉(onsen)資源をもたらした。

日本最大の単一源泉・秋田県玉川温泉の大噴源泉

日本の温泉資源の現状を、温泉を主管する環境省の統計で示すと、「源泉(湯元)総数」は約２万 7000。宿泊施設のある「温泉地」数は約 3000。「総湧出量」は毎分約 250 万Ｌ(litre)。平均的な家庭のバスタブを湯で満杯にするには 200Ｌあれば足りるから、1 分間で 1 万 2500 軒分のバスタブを温泉で満たせるほどの湧出量である。

しかも火山性温泉が中心なので、摂氏 42 度以上の高温泉と、酸性泉、硫黄泉といった特色ある多様な泉質に恵まれている。このように温泉資源に恵まれた日本だが、一体いつ頃から温泉を利用していたのか、残念ながら確かな証拠はない。

ヨーロッパでは、(西暦)紀元前からの温泉利用の証拠となる泉源地への奉納物が多数出土している。しかし石より木を使う文化が主流の日本では、酸性土壌が多いこともあって、利用の痕跡が残されていない。とはいえ紀元前数千年にわたる縄文時代の集落遺跡

が、中部地方から北海道にかけて温泉が湧く場所近い高台に見られ、寒い冬をしのぐために温泉を利用していたのではないかと容易に想像できる。

秋田県大湯温泉近くの縄文遺跡「大湯万座環状列石」

それでは文献の時代になってからはどうだろうか。現存する日本最古の書物は、7 世紀後半の飛鳥時代より作成が始まり、奈良時代の 712 年に完成した『古事記』である。それ以前となると、日本に関する記述が現れる中国の正史しかない。

3 世紀に西晋の陳寿が撰んだ『三国志・魏書』巻 30「東夷伝・倭人」(通称「魏志倭人伝」)は、当時の日本の社会・政治・風俗文化を詳しく紹介している。その中に、家人が亡くなると「已葬 挙家詣 水中澡浴 以如練沐」と、死の穢れをすすぎ清める禊の入浴について記しているが、温泉に関する記述はない。これは火山の阿蘇山の記述がある、7 世紀前半に唐の魏徴らが撰んだ『隋書』倭国伝に至るまで同様である。

その中国で「温泉」という言葉が文献に登場するのは、東漢時代の天文・地理学者の張衡(78～139)が著した『温泉賦』が初出で、「有疾癘兮、溫泉汩焉、以流穢兮」と温泉の効用を述べている。それ以降、たとえば北魏の酈道元が編さんして 515 年頃成立したとされる地理書『水経注』には「溫泉」がよく出てくる。「有溫泉、療疾有験」「右出溫湯、療治萬病」(巻 13)、「瘍痍百病、浴者多癒」(巻 37)と温泉の効果・効用を表す記述も少なくない。

『水経注』には「溫泉」と同じ意味で「溫湯」という言葉も出てくる。「溫湯」は先の3世紀の『魏書』巻29「華佗傳」にも記されていた。日本に中国古典籍が導入されるとともに、「溫泉」「溫湯」という言葉や温泉の効用にふれた記述も、温泉が豊富な日本に伝えられた。ただし、「溫泉」という言葉はすぐには使われていない。

代わりに温泉や温泉地をさす言葉として日本の文献に最初に出てくるのは、日本の原語で湧水や温泉、(yu-mari＝尿、yo-dare＝涎といった)人体からの温かい分泌物の意にも用いられる「yu」という言葉に当てた「湯」の一文字だった。

日本で最初に温泉が登場する文献は、先の『古事記』である。その「允恭天皇」条に「伊余湯(Iyo-no-yu)」と記された伊予国(現・愛媛県)の道後(Dogo)温泉が登場する。「允恭天皇」は『宋書』倭国伝に記された5世紀の「倭の五王」のうち三番目の「済」とみなされるから、温泉が日本の文献に初めて出てくるのは5世紀の話になる。

「伊余湯」はじつは、喜びと効用に満ちた温泉地として紹介されたわけではなかった。允恭天皇の「容姿佳麗」な皇太子が「艶妙」な同母妹と禁断の恋におちたため、皇太子の座を追われ、流刑になった先が「伊余湯」だった。「伊余湯」(道後温泉)は古くから知られた温泉地だったので、都の貴人を迎え入れる施設も整っていたのだろう。

『古事記』成立の8年後、720年に完成した『日本書紀』最初の温泉記述は、飛鳥時代の舒明天皇が631年9月から3か月間も「幸(于)津国有間温湯」と、摂津国(現・兵庫県)の有馬(Arima)温泉に出かけたという初温泉行幸記録である。『日本書紀』には7世紀前半から後半にかけての天皇や皇族の温泉行が複数記録されている。登場する温泉地は「有間温湯」、「伊予温湯宮(Iyo-no-yu-no-miya)」(道後温泉)、「牟婁温湯(Muro-no-yu)」または「紀温湯(Ki-no-yu)」と記された和歌山県南紀白浜温泉、「束間温湯(Tsukama-no-yu)」(長野県美ヶ原〔Utsukusigahara〕温泉と想定)の4か所。そのため道後、有馬、南紀白浜温泉は「日本三古湯」と称えられている。

和歌山県南紀白浜温泉の崎の湯露天風呂

『日本書紀』でも温泉は「溫(温)泉」ではなく、「温湯」という言葉で表される。日本人には「温かい液体」「温もり」を表す原初的な言葉だった「yu(湯)」のほうが、温泉にふさわしいと考えたのかもしれない。今日もなお「湯」や「出湯(ide-yu)」という言葉は温泉と深くかかわりがある。

一方、「溫(温)泉」という言葉の初出は、日本の各地域(kuni＝国)の地誌「風土記」の一つとして朝廷の命で 733 年に完成した『出雲国風土記』で、現在の島根県海潮(Ushio)温泉を「川中温泉(出)」と紹介している。「温湯」も「温泉」も「湯泉」もみな「湯」同様に「yu」と読む。それに「溫」ではなく俗字の「温」を使うのも日本の特徴である。『出雲国風土記』以降、『万葉集』を含む 8 世紀の奈良時代の文献は、温泉を「温泉」と表記するようになった。

たとえば、日本最大の湧出量と源泉数を誇る別府(Beppu)温泉がある大分県の大半を網羅した『豊後国風土記』を見よう。

「玖倍理湯井。湯色黒、逞常不流。人窃到井辺、発声大言、驚鳴涌騰、二丈余計。其気熾熱…縁辺草木、悉皆枯萎」

今や観光名所の別府・鉄輪(Kan-nawa)地獄の描写である。熱泉を噴出させる間歇泉で、温泉の熱気で周囲の草木も枯れてしまう。入浴できないほど熾烈な温泉状況であったことがわかる。同書にはまた、温泉が誕生した瞬間も記録されている。

大分県別府温泉鉄輪地獄の海地獄

「大有地震、山崗烈崩。此山一峡崩落、慍之泉処々而出。湯気熾熱、炊飯早熟」

地震で山峡が崩れて湧き出た熱泉に驚いてばかりいず、その温泉で飯を炊くと早く蒸せた、というリアルな観察眼も忘れない。別府・鉄輪温泉でも、温泉に含まれる塩土で家の柱を塗った。古代からの日本の温泉利用法はすでに入浴だけではなかったのである。

続いて 794 年に都を京都に移して始まる約 400 年の平安時代、貴族や才能あふれる朝廷女官らによる日記や数々の物語作品に温泉が登場する。日本人の温泉受容はさらに広がりをみせていく。

本文・写真　石川理夫